

Back Number

本論文は

世界経済評論 2024年1/2月号

(2024年1月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

ふくろう、ペリット、有名人



佐藤 紘彰

『What an Owl Knows (ふくろうが知っていること)』という Jennifer Ackerman の本が出て、いくつか思い出す。

一つはかなり前だった。ある人がセントラル公園の木の根元で小さな固まりを見つけ、何だろうと、近くの American Museum of Natural History に持っていった。すると専門家が調べて、これはこの辺りにいる一番小さなふくろうのフンです、と教えてくれたという。

いま見ると、これは Northern Saw-whet Owl だったらしい。鳥類保護団体 Audubon によると、この公園で越冬するふくろう 6 種類のうち、普通にそうする Great-horned Owl は背丈が平均 43~64 センチ、Barred Owl が 48~53 センチであるのに対し、Northern Saw-whet Owl は 17~22 センチと小さいからだ。

Saw-whet という変わった名は、出す声が鋸 saw を砥石 whet に当てて引く時の音に似ているからと説明にある。北アメリカ全体で見ると、このふくろうより小さなものには 6 種類あって、中で一番小さい Elf Owl になると、12.5~14.5 センチ、とすれば雀くらいの大きさで、片手に収まる。

シロフクロウ出現

ずっと最近の 2023 年 2 月には、ふくろうがセントラル公園動物園から抜け出した。種類は Eurasian Eagle-owl、名は Flaco。この類は世界でも最大で、56~75 センチに達する。Flaco は自由を楽しんでいるらしく、まだ公園周りの街路に住んでいるという報道が 7 月まであった。以後どうなったか、報道はない。いまでも自由を謳歌しているかもしれない。

セントラル公園の外では、Snowy Owl が近くの空港に現れた。2013 年で十年も前になる。綿でふっくりつつまれたようなこの鳥は日本では

「白ふくろう」と呼ばれる。背高 53~65 センチに達し、ふつうは北極圏に住む。それがニューヨークやニュージャージーの空港に現れたのだ。南に現れた理由は、常食のレミングや雷鳥などの突然の激減などいくつか推測されているが定かでない、と梟調査研究所 Owl Research Institute はいう。

すは空港に Snowy Owl 出現! と 3 匹射殺された。すると市民から、殺すのはけしからん、と訴訟があった。これに対して 2016 年 1 月連邦控訴院は殺しても構わんと結論した。けしからん。

糞にあらず、ペリット

ところで、先にセントラル公園にいる「いちばん小さいふくろう」の「フン」と書いたが、これはほくの間違いだったらしい。ほくがこれを読んだ記事は週刊誌 The New Yorker だったろうが、そこでは pellet と言ったはずだ——と、この記事を書いていて思いついた。

ふくろうは捕食した生き物をすべて呑み込むので、消化できない毛皮や骨は砂囊に集めて時々呑んだ葉巻のようなものを吐き出す。これを動物学で pellet と言う。これに対する特別の日本語はないのか、英語のまま「ペリット」と呼ぶようだ。似たものを吐き出す鳥は梟の他に、鷲、隼、鷹、鷲、鶺鴒、鳩、翡翠などなどいるのに、日本ではこの現象に特に気づかなかっただろうか。

ちなみに、コーネル大学は古くから鳥類実験室 Cornell Lab of Ornithology を設けているが、そこではふくろうのペリット分析を中高の教材分野としているという。

公園の有名人

冒頭に挙げた本は、副題にふくろうを「The

World's Most Enigmatic Birds (世界で最も謎めいた鳥)」とする。これは一見、矛盾かもしれない。著者のアッカマンが冒頭で、「ふくろうは世界でもおそらくもっとも特異な目(もく, order)の鳥で、体を直立に保ち、大きな丸い頭をし、前方を見つめる丸い目をしているから、他の生き物と取り違うのがむずかしい。子供でもこれを難なく見分けることができる」と述べている通りだからだ。確かに、雑誌の写真などで見るふくろうは、そのような姿をし、顔をしている。

しかし、それは日差しのあるところに出ている時に写真に撮り、動画に捉えたからで、おおかた夜行性のこの鳥は、ふつう、そのような姿で目の前に現れることはない。そのせいだろう。二、三年前、「セントラル公園の有名人」Barry が自動車にぶつかって死んだ時、悲嘆的になった。というのは、このふくろうは大型の Barred Owl で、かつ「外向的 extrovert」で日中でも木にとまっていたから、誰でもすぐ気づいたからだという。

そうでもなければ、日中では、普通、見つけるのがなかなむずかしい。自然観察者かつ写真家 David Lindo によると、ふくろうの存在を知るには、「木を綿密に調べて、ペリットか跳ね返し(splashback)を探さないといけない」という。ここで「跳ね返し」は「ふくろうの糞便」とアッカマンは説明を添える。

実際、ぼくはふくろうを見たことがない。理由の一つは、1968年アメリカに来る前は、1950年前後数年間長崎の小さな飛鳥を除き、博多、北九州、京都は左京区と、薨を争う都会地に住んだことがある。しかし、アメリカにやって来てからはかなりの鳥を見てきたとはいえ、ああ、これはふくろうだろうと思ったのは、友人の、木々に埋まった山のとっぺん近くの家で、夜、それらしい声を聞いたのが唯一である。

種類の増えるふくろう

アッカマンによると、現在260余種のふくろう

が確認されているが、この数は増えるだろうという。これは、この鳥が全ての大陸のほとんどあらゆる生息地に住んでいて、砂漠から草原、熱帯の森林、山の斜面、雪の多いツンドラまでどこでもいるが、とすれば、まだ見つけられていない種類も多いだろうからだという。

ふくろうは、その大小その他の面でも振幅が大きい。先に触れた Elf Owl は大きさは松笠くらい、重さは1セントを数個重ねたくらい。これも先に触れた Northern Saw-whet Owl は「大きな柔らかい蛾のように飛ぶ」と、ピュリッツァー賞を受けた自然詩人 Mary Oliver が描いた。これに対し、Flaco の属する Eurasian Eagle-owl となると子鹿を掴みあげる力を持つ。鳴き声をそのままとって「Uhu ウフ」とも呼ぶ。

草原に住み、細長い脚でひょんひょん歩き回る Burrowing Owl は、prairie dogs やアルマジロなどの穴にもぐりこんで住むことからその名があるが、地下の穴に住む唯一のふくろう。昼行性であることも珍しい。ときどき、え?と首を傾げる。背丈はせいぜい28センチ。食べるのは昆虫や小さな野鼠のたぐい。

ふくろうでも重さ最大なのは Fish Owl。名は魚を主食するため。日本では北海道に住み、シマフクロウ(島梟)と呼ばれる。

叫びは又エか

オーストラリアの東海岸沿いに住み、主に有袋類をとって食う Powerful Owl。名は、がっちり足に掴まれるとすぐ死ぬことによるともいう。その北東のソロモン島の Fearful Owl。アッカマンによると、名は10秒ごとに血の凍るような叫びを出すことによるとあるから聞いてみたいものだが、そうになると、源頼政が弓を「よつびいてひょうど」射った鶉の鳴き声みたいなものだろうか。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY